

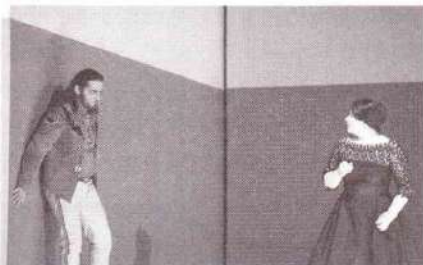
# Scramble Shot

## Opera ホモキとルイジのコンビによる チューリヒで初のヴェルディ

演出家でもあるチューリヒ歌劇場総裁アンドレアス・ホモキと音楽総監督ファビオ・ルイジのコンビが、2012年の就任後初めて、ようやくヴェルディ作品に挑んだ。「ヴェルディのオペラの中で最も重要な作品」というルイジの意気込みは、序曲からすでに表れていた。乱暴なほどに運命的なイタリアのドラマティックさと、ルイジらしい優しさがバランス良く配置され、細部に至るまで丁寧に作り上げた音楽は、コンサートマスターのバルトウオミ・ニジョウが奏でる完璧なソロに代表されるように、繊細で上品だった。

レオノーラのヒブラ・ゲルツマーヴァはコンパクトにまとまった聴き心地の良い声の特徴だが、高音が多少叫ぶ傾向にある。カルロ役のジョルジュ・ペテアンは美声に磨きがかかり、高音も楽に出して余裕を見せた。そこにアルヴァーロ役のマルセロ・プエンテが登場した時、緊迫感を増していた「運命の歯車」が拍子抜けしてしまった。前述の二人の音楽性と比べて、あまりにも稚拙な歌唱と演技だったからだ。1カ月前に代役が決まったので仕方がなかったのだろう、と我慢して聴いているうちに、危なげなく決める高音と、全力投球する熱意で、なんとか許容できるようになった。

「指揮者も演出家も同じくらい恐れている作品」とルイジも語る《運命の力》は、イタリアでは不吉なオペラというジンクスもあるが、ホモキの演出ではその呪いすら消滅するような、神通力のない舞台が残念だった。(中 東生)



ホモキとルイジで初のヴェルディ作品となった《運命の力》から。アルヴァーロを歌ったプエンテ(左)とレオノーラを歌ったゲルツマーヴァ ©Monika Rittershaus